

『パルツィヴァール』における 異教徒像ならびに東洋像について（2）

青 木 三 陽

5. 第三の東洋——世界の果ての地としてのインド

ガムレットが活動したのは、東洋の地名が「異境」の記号として用いられた⁴⁰⁾空間であった。つまりそれらは、物語の舞台が西洋世界にとっての「異境」であることを知らせるシグナルとして機能していたのである。一方、ガムレットの息子パルツィヴァールもまた、その冒険の舞台たるに相応しい「異境」に到達する。グラールの世界テラ・デ・サルヴェーシェ（野生の国）がそれである。すでにしてこの名称が予想させる通り、ここが「異境」たる所以は、外部の宮廷世界とはまったく別の、当時の人間たちにとっても奇怪と呼ぶしかない生活様式を有しており、なおかつ様々な怪異で満ち溢れているからである。

では、このあらたな異境は、地理的にはどこに位置するのであろうか。主人公たちが馬で到達できる範囲にあること、アルトゥース宮廷と短期間のうちに往来可能な距離であることを考慮すれば、少なくともそこは西洋と陸続きの地として設定されているらしい。ところが奇妙なことに、この異境の住人は、むしろ東洋の領域の方と密接な直接交流があるのである。グラールに召命された者以外決して到達できないはずのテラ・デ・サルヴェーシェに、東洋の住人達は、何の問題もなく使者を送りこみ、あるいは自力で到達している。西洋の人間の侵入を阻む絶対的な隔絶が東洋の人間に対しては機能していないことにな

る。すなわちテラ・デ・サルヴェーシェは、具体的地理関係はともかくとして、概念的には西洋よりも東洋に近い世界として提示されていると考えられよう。そしてまた、この異境の中心にある事物・怪異は、ヴォルフラムの時代に司祭ヨーハン伝説やアレキサンダー伝説によって「東洋の神秘」として知られていた諸情報と驚くほどの一致を見せるのである。テラ・デ・サルヴェーシェはそれらを彷彿とさせる物と人とで満ち溢れている。ここでも、当時流布した伝説的「東洋」についての情報が物語世界にとっての異境を創り出すための装置として利用されているのである。

さて、前節までに引き続き、本節でも「東洋」という言葉が用いられている。今回登場する東洋は、後述のようにバールクの国やツァツァマンクと様々な特徴を共有している。だがそれにもかかわらず、この第三の東洋は概念的にさらに「東方」に位置すべきものである。バールクの国が当時の西洋の実践知に基づき、ツァツァマンクが体系的知に多くを頼って創り出された国であったとすれば、神が直接介在し、後述のようにあの司祭ヨーハンとも強い結びつきを持つこの「地上の楽園」たる第三の東洋は、キリスト教徒にとってすべての事実に行先してア・ブリオリに認められるべき神学的知とでも呼ぶべきものに一部基盤を置くからである。今回登場するのは、西洋から見れば限りなく東の果てに近い地としてイメージされる東洋、すなわちもともと狭義での「インド」である。本節では『パルツイヴァール』に怪異と奇跡を提供するこの第三の東洋とその住人たる異教徒たちについて観察したい。

グラールという物体への好奇心からテラ・デ・サルヴェーシェへ使者と贈答品を遣わし、直接交流のきっかけをつくったのが、ガンジス河畔のトリバリ⁴¹⁾ポート国の女王ゼクンディルレであるとされる。その地のことを「我々西洋に住む者はインディーアーと言っているが、かの地東洋ではトリバリポートと言っている」(823, 2f)。すなわち『パルツイヴァール』におけるトリバリポートとは、インドの現地名として使用されている名である。

トリバリポートの国は、地上の三分の二を支配するあのバールクの国と並び

称される富強を有するとされる。⁴²⁾だが、この国の具体的な風土、風俗その他についての情報は『バルツイヴァール』中散発的にしか与えられておらず、そこから受容者が具体的なイメージを得ることは困難である。その直接の原因は、トリバリポートがパールクの国やツァツァマンクとは違って主人公が足を踏み入れる舞台となっていないことに起因するのかもしれないが、たとえその点を差し引いても、上述の二つの東洋と比較したとき、饒舌なヴォルフラムの口数が極端に少なくなってしまうのは見過ごせない。少なくとも、フェイレフィースの旅程に関するくだりでそれを語る可能性は十分存在しているはずなのである。あるいはこの直接描写の少なさ自体が、第三の東洋に対して抱かれた距離感の一端を物語るものであるのかもしれない。

トリバリポートの描写に際して挙げられる第一の特徴は、またしても物質的奢侈、富の源泉の地としてのイメージである。例えば「あの異教の国のタハブ
ロニト⁴³⁾の町では、この世の最高の望みが叶えられると言われ…」(316, 30f), 「多くの河川が女王の国に、砂の代わりに宝石を運んでおり、その上女王はまた大きな金山を所有している」(519, 14ff)。加えてこの国は他国の富の大きさの程度を説明するためにもたびたび比較の対象として持ちだされる。「異教の
国トリバリポート、カウカザスの山脈、⁴⁴⁾さらには人の口に語られたいかなる富も…」(326, 22ff), 「…パールクの国とトリバリポートを別にすれば、彼(フェイレフィース)の富強に比肩しうる国は存在しません」(328, 11ff)。

では、この第三の東洋たるトリバリポートに住んでいるのはどのような人間たちであろうか。かつてガハムレットが訪れた第二の東洋ツァツァマンクの異教徒は、豊かな富を所有する一方で、西洋からの距離故に「黒い肌」という身体的差異を見せた。富裕さと身体的差異という二点が、西洋世界との異質性をあらわす最も明快なシグナルとなっていたのである。トリバリポートも、上述のようにユートピア的様相を呈する一方で、その住人は西洋の人間とは異なる身体を有していることが明らかになる。

diu het in ir riche
 hart unlougenliche
 von alter dar der liute vil
 mit verkêrtem antlützes zil:
 si truogen vrendiu wilden mâl.

(訳) …彼女（ゼクンディルレ）のこの国には昔から今に至るまで、本当に醜い顔の人が多い。彼らは見たこともない、奇妙な顔つきをしていた。(519, 5ff)

トリバリボートの住人がそのような容姿を持つことになった原因は作中で言及されている。それは、彼らの直接の祖先たる「アダムの子」が、妊娠中に自らの欲望に耐えられず、父の禁をやぶってまで草の根を食したからであるという (518, 1ff)。新たに付け加えられたこの情報もまた、インド＝トリバリボートの住人がより原初の人間に近いことを予想させ、この国の地理について強い印象を与えるものとなるであろう。かつてアダムが住まったエデンの園は、世界の東の果てに位置すると認識されていたのであるから。

ところで、この第三の東洋現地に住まう異教徒たちは、以降、物語中にまったく登場せず、受容者はこれ以上の具体的情報を得ることができない。宮廷文学において通例ならば多くの行数が割かれるべき高貴な身分の女性（女王）の容姿についてすらそのようなのである。⁴⁵⁾例外的に身体性を伴った唯一の登場人物は、トリバリボートから西洋に渡来したとされる、とある一組の姉弟のみである。上述のように、トリバリボートの国とテラ・デ・サルヴェーシェには直接の交流があるのだが、この姉弟は、前者から後者に貢物と共に遣わされてきた存在である。この二人、特に姉クンドリーエの身体描写がインドの民の「奇妙な」容姿を唯一詳しく再現し、代表人物とも呼べる存在となっているので、以下にその主だった部分を抜粋してみたい。

über den huot ein zopf ir swanc
 unz ûf den mûl: der was sô lanc,
 swarz, herte und niht ze clâr,
 linde als eins swînes rûckehâr.
 si was genaset als ein hunt:
 zwên ebers zene ir für den munt
 giengen wol spannen lanc.
 ietweder wintprâ sich dranc
 mit zöpfen für die hârsnuor.

(訳) 編まれた髪は帽子越しに垂れ下がって、らばの背に達していた。髪は長く、黒く、硬く、あまりきれいではなく、豚の剛毛ほどの柔らかさ⁴⁶⁾だった。彼女の鼻はまるで犬のようで、口からは指尺の長さほどの二本の猪の牙が伸びていた。両方のまつ毛は編みこまれて額のヘアバンドにまで延びていた。(313, 17ff)

Cundrî truoc ôren als ein ber,
 niht nâch friundes minne ger:
 Rûch was ir anlûtze erkant.
 (...)
 gevar als eines affen hût
 truoc hende diz gæbe trût.
 die nagele wâren niht ze lieht;
 wan mir diu âventiure gieht,
 si stüenden als eins lewen klân.

(訳) クンドリーエは熊のような耳を持っていた。顔は毛むくじゃら

で、ミンネの相手として求めるようなものではなかった。(…) 愛らしいそのお方は猿⁴⁷⁾のような肌の色をした手を持っていた。指の爪は光沢がなく、原典が私に伝えるとおりならば、まるでライオンのそのようだった。(313, 29ff)

gel als ein thopazius,
ir zene lanc: ir munt gap schîn
als ein viol weitin.

(訳) 彼女の歯はトパーズののように黄色く長く、唇はすみれのように青かった。(780, 20ff)

このように、インドの住人の代表としてのクンドリーエの身体は半動物的とも言える特徴を有しており、先ほどのツァツァマンクの住人と比較したとき、西洋の人間との身体的差異ははるかに大きなものとなっている⁴⁸⁾。なぜ彼女たちがこのような身体を持たなければならないのか。その理由は明快であり、すなわち第三の東洋たるこのインドの地は、西洋から見てツァツァマンクよりさらに東方に位置するからである。クンドリーエの出身地として持ち出される狭義での「インド」とは常に世界の東の果ての地の別称であり、中世末に至るまで怪異の源泉であり続けた⁴⁹⁾。これもまた当時の人間にとっての共通知である。ツァツァマンクの国よりもさらに遠方に位置するがゆえに、インドの住人はより大きな差異をもった身体を備えていなければならないのである。

かつて、黒い肌をもつベラカーネは、否定的に評価されるはずの特徴にもかかわらず宮廷詩人の讃美の対象となり、物語主人公の妻となることが可能であった。では、西洋人にとってさらに「奇妙」な身体を持ったこのインドの人間には、ヴォルフラムによってどのような評価が与えられているだろうか。東の果てに住まう人間としての特徴を与えられたその一方で、アルトゥース宮廷に

登場したクンドリーエは最新、最上級の宮廷風衣装にその身を包み、礼儀作法も完璧であるとされる。そしてさらに、彼女は西洋が⁵⁰⁾12世紀ルネサンスを通じてイスラム圏から摂取したあの学問的知識、ならびにその伝達手段となった諸言語を身につけている。

der meide ir kunst des verjach,
 alle spräche si wol sprach,
 latin, heidensch, franzoys.
 si was der witze kurtoys,
 dialetike und jëometri:
 ir wären ouch die liste bi
 von astronomie.
 si hiez Cundrie:
 surziere was ir zuoname;

(訳) 彼女には学識があつて、あらゆる言葉——ラテン語、異教徒の言葉、フランス語——を立派に話した。また深い教養も持っており、幾何学に通じ、天文学⁵¹⁾の知識もあった。その名はクンドリーエといい、魔術師というあだ名を持っていた。(312, 19ff)

物質的富裕に対する憧憬、身体的差異に向けられる好奇の念、学問の先達者としてのイメージ。クンドリーエという人物には、当時の西欧人が東洋の住人に対して抱いていた諸イメージがあらためて統合されているといえよう。彼女の姿において、西洋の人間が複数の知の次元から獲得した異教徒像が、「東洋の住人」という上部概念の中で奇妙に混合しているのである。しかも再び、西洋風の衣装をまとして。そして、これほど大きな身体的差異を有しているにもかかわらず、クンドリーエの存在は西洋の人間にとって破壊的、脅威的なもので

はありえない。もちろん彼女は、対話不可能な「怪物」でもない。むしろ西洋世界の理想の体現者たるアルトゥース宮廷に真理を告げ、忠告を与えるという教育的役割を担う存在となっている。今まで『パルツイヴァール』中に登場した東洋の中で最も遠方からやってきて、それゆえ最も大きな異質性を担う彼女もまた、宮廷的価値観に沿う形で存在可能な「人間」として評価がなされるのである。

6. 現実と陸続きになる「異境」

クンドリーエと並んで、物語終盤には、東洋からアルトゥース宮廷へと来訪する人物がもう一人存在する。ガハムレットとベラカーネの間に生まれた男性、すなわちパルツイヴァールの異母兄フェイレフィースである。かつてベラカーネの黒い肌、クンドリーエの動物的身体がそれぞれの世界の異質性を象徴していたように、フェイレフィースの身体もまた彼の世界に相応しい特徴を持っている。彼の肌は「不思議な輝きを持ち、どんな人間とも様子が違って」(328, 15f) いて、その色は「白黒まだら」(328, 17) なのである。父と母から受け継いだ、白と黒の入り混じった肌。物語の結末部分に向け、彼はまさにこの肌の色に相応しい役割を果たすことになる。

フェイレフィースは、父ガハムレットの旅の道程を逆方向にたどり、異教の国から西洋世界へ到来する。この「洗礼を受けたことがない異教徒」(753, 2f) は、しかし同時に、彼の母をはじめとしてこれまで登場した異教徒像が皆そうであったように「宮廷の作法を心得た者」(735, 1) でもある。肌の色は違えども、洗練された騎士に相応しい服装がその身体を覆っている。そしてまた、多くの宮廷叙事詩の主人公たちと同様、彼はクルトワジーの理想の内では男性にとって最も重要な位置を占める二要素「ミンネと榮譽を求めて」(736, 1f) 冒険を続けるのである。

このように異教徒でありながらも宮廷的騎士としての外的条件を満たしてい

るフェイレフィースであるが、一連の彼の描写においてひととき目を引くのは、その豪華な装備品に象徴される富の大きさである。この点、詩人の強調の度合いには著しいものがある。フェイレフィースの装備の豪華さ、富の大きさについての描写をここで挙げようとするれば、それはヴォルフラム自身も「十分すぎる説明をしてもまだ足りず、いくら言ったところで言い尽くせるものではない」(735, 12ff) と述べているように、枚挙にいとまがないものとなる。

swaz diende Artûses hant
 ze Bertâne unde in Engellant,
 daz vergulte niht die steine
 die mit edelem arde reine
 lâgen ûf des heldes wâpenroc.
 der was tiure ân al getroc:
 rubbîne, calcidône,
 wârên dâ ze swachem lône.
 (...)
 die wâren steine tiure
 lâgen drûf tunkel unde licht:
 ir art mac ich benennen nieht.

(訳) ペルターネやエンゲルラントにおいてアルトゥースの手中にあるいかなるものも、この勇士(フェイレフィース)の軍衣の上にしつらえられた高貴にして純正な宝石の価値には値しなかった。その軍衣はまちがいなく高価なもので、紅玉や玉髓をもってしてもその代価とはなりえなかった。(…) その上にはまごうことない本物の高価な宝石が、あるものは鈍く、あるものは明るく光っていた。その宝石の性質を私は知らず、述べることができない。(735, 15ff)

ここに引用したのは一例のみであるが、ヴォルフラム自身、そしてあらゆる登場人物たちの口を通じていたるところで、フェイレフィースの装備品の高価さや彼の国の富の大きさについての賛嘆がもたらされる。しかもそれは、西洋のどんな比較対象をも凌駕する。西洋宮廷社会の理想（もちろん物質的側面も含めて）の体現者であるはずのアルトゥース王や円卓の騎士たちすら、この異教の騎士の前ではいわば引き立て役にしかっていない。装備の高価さ、またそれによって象徴される富の大きさに触れられるのは宮廷文学の君主像にとって常のこととしても、フェイレフィースに関しては、その頻度の高さが群を抜いている。主人公であるはずのバルツイヴァールについても、このフェイレフィースには遠く及ばない。

そしてさらに、彼が率いる軍勢についての記述は、その支配領域の広大さをも印象付けるものである。

er hete fünf und zweinzec her,
 der neheinez sandern rede vernam,
 als siner rîcheit wol gezam:
 Alsus manec sunder lant
 diende siner werden hant,
 Môr und ander Sarrazîne
 mit ungelîchem schîne.
 in sînem wît gesamenten her
 was manc wunderlîchiu wer.

（訳）彼は互に言葉が通じない二十五の軍勢を持っていたが、それは彼の富裕さにまことにふさわしいことであった。それほどに多くの国々、そして異なる容姿をもったムーア人や他のサラセン人たちが、この高貴な彼に奉仕していたのである。この遠くの国々の人々で編成

されていた軍勢の中では、多くの珍しい武器が見られた。(736, 28ff)

フェイレフィースが統率するという「ムーア人や他のサラセン人たち」。すなわち彼は今まで登場した東洋の複数の地域の支配者である。彼がこれほど大きな富と支配権を持つに至った理由は、第十巻における挿入句的なごく簡単な文で前もって明かされている。フェイレフィースは、ここに至る旅の途上で上述のインド＝トリバリポートをも通過し、その際に女王ゼクンディルレとその領土を「騎士の戦いに勝って手に入れ」(519,3f)⁵²⁾ ているのである。つまりフェイレフィースは、物語に初登場した時点で、両親から相続した国、トリバリポート、ここに至るまでに戦いにおいて獲得した国々の支配者ということになる。これまで『パルツィヴァール』中に登場した東洋の複数の領域がフェイレフィースの支配下に入り、こうして彼には、異教徒の複数の領域のイメージを一身に背負い、しかも後に西洋世界との緊密な結びつきをもうちたてる役割が与えられることになる。フェイレフィースの富強の強調は、彼のこの役割を前もって準備するために有効な手段であったといえよう。

実際には同時代人が誰も目にしたことがないエチオピアやインドの「地上の楽園」は、それ単体では地上とはいってもほとんど超現実的次元においてイメージされ、歴史性を要求する宮廷叙事詩の舞台とするにはあまりにも遠い領域であるかもしれない。しかし、フェイレフィースによって、アクチュアルな部分も含む「東洋」概念の下に統合され、しかも西洋との緊密な関係を築かれたそれらの地は、異境としての特徴を留保しつつも、フランスやドイツの一地方とも地続きの、同じ地平に存在する一地域として存在する可能性を獲得するだろう。異なる次元の知に依拠した東洋が一つに統合されることで、夢想が実在性を有する世界が創造される⁵³⁾。ヴォルフラムが『パルツィヴァール』という新しい物語の舞台として要求したのは、まさにそういった世界なのであり、異教徒フェイレフィースやクンドリーエはその立役者となるのである。

こうして、これまで登場した東洋世界全体を代表する立場となった異教徒フ

ェイレフィースと、宮廷叙事詩の主人公パルツィヴァール。この異母兄弟が相手の素性を知らぬまま行う遭遇戦的決闘は、再び十字軍文学との外面的類似を見せつつも、内容的にはその裏返しとも呼べる印象を与えるものとなっている。受容者はここですで、あえて武勲詩を想起させるような表現・描写が用いられていることに気づかされるであろう。二人の戦闘場面においては「キリスト教徒」der getoufte と「異教徒」der heide という二つの言葉の対比が頻出する。そして、この両者はまるで武勲詩の武将たちのような関の声（自分の国の首都の名）をあげるし、複数の民族を束ねるフェイレフィースの指揮官像には『ローラントの歌』の中で四十二の軍勢を率いる異教徒の長バリガンのそれを彷彿とさせるものがある。⁵⁴⁾

しかし続いて、ヴォルフラムは次のような言葉を挿入することでキリスト教徒と異教徒の対立を中和化しようと努めるのである。ヴォルフラムは、信仰の違いにもかかわらず「この異教徒をキリスト教徒から分けることはできない」（738, 11f）し、さらに「彼ら二人は一つ」（740, 28）であると口にする。それどころか、彼は神への保護の祈りをキリスト教徒と異教徒の双方に向けさえする。「どうか、神がガハムレットの子供をお守りくださいますように。この願いはキリスト教徒と異教徒の双方に向けられているのだ」（742, 14ff）。前もって武勲詩との比較を誘導されていたからこそ、これら二つの文学間の差異はより明確なものとなるだろう。

十字軍文学においては、キリスト教徒と異教徒との決闘は神盟裁判的性格をおびたものであったが、『パルツィヴァール』はこの点でもそれを反転させた様相を見せる。二人の戦闘は結局、主人公の剣が真っ二つに折れることにより中断し、その後の対話によって彼らは互いの関係を知り、和解が成立する。つまりヴォルフラムは、神の意志の介在による、どちらかの死をもってもたらされる最終決着という武勲詩の常套手段を退け、あくまで人間同士の対話に戦闘の終結を委ねるのである。和解に至るまでの経過とパルツィヴァールの態度表明には、あらためて異教徒に対する意識の変化がはっきりと認められよう。た

とえ異なる身体と信仰を有していたとしても、東洋の住人は意思疎通不可能な怪物でもなければ、アンチクリストのイメージと結び付いた脅威でもない。彼らは理性的な手段によって相互理解可能な相手であり、敬意に値する対象となるのである。和解の直後にパルツィヴァールが異教の君主フェイレフィースに対して発する次の言葉は、西洋の東洋に対するその姿勢を实によく表わすものである。

der sprach 'bruodr, iur rîcheit
glichenet wol dem bâruc sich:
sô sît ir elter ouch dan ich.
mîn jugent unt mîn armuot
sol sölher lôsheit sîn behuot,
daz ich iu duzen biete,
swenn ich mich zûhte niete.'

(訳) 彼はこう言った。「兄上、あなたの富はカリフのそれに比べられます。それに私よりもあなたの方が年上です。若く貧しい私は常に礼儀正しくありたいと努めています。あなたを『お前』呼ばわりするような無作法はしたくありません」(749,24ff)

自らを「若く貧しい」と卑下するパルツィヴァールの姿には、対等な立場を認めるどころか物質的側面や知的領域における東洋の優位性を認める西洋人の心情、さらに敬意さえ透けてみえはしないだろうか。

7. おわりに

ヴォルフラムの描く詩的異教徒像には、キリスト教世界にとっての「他者」

たる存在に対して抱かれた当時のイメージが複雑に絡み合いながら反映されている。他者であるが故に、彼らは表層の部分において、西洋との明確な異質性を有している。だが、宮廷時代に先立つ時代の文学とは異なり、『パルツィヴァール』はこの他者を殲滅すべき対敵の位置において説明することをしない。異教徒は、宮廷社会の関心軸に沿って共存可能な存在に書き換えられ、同時に理性によって相互理解可能な存在へと変貌を遂げているのである。ここでの他者性はむしろ、異境を冒険の舞台とする宮廷叙事詩という文学にとって必要な環境を設定する、そのための道具・手段となっているといえるだろう。

宮廷時代に先立つ時期の異教徒像は、無知から出た偏見と教会側の当為の原理にそっての定義付けに基づいていたのであり、時間を経てのこのような修正はむしろ当然であったと言えるのかもしれない。だが、これほど劇的な変化を引き起こした要因はそれだけでは説明できまい。端的に言えば、そもそも異国的な文化の諸要素を自己の内に取り入れることで発展してきたのが宮廷文学であり、その受容者たる世俗宮廷には他者を受け入れる思想的柔軟性が前提とされているのである。ちょうど、最初はどうとまれたベラカーネの黒い肌、フェイレフィースの白黒の肌がすぐに敬愛すべき対象として西洋の人間に受け入れられていったように、『パルツィヴァール』という作品には、宮廷文学のおびたこのような特徴を、特に旧文学との比較を誘導することによってあらためて明示し、その歴史的発展を示そうとする意図が読み取れる。ヴォルフラムがそれまでの宮廷文学では不可視の存在となっていた「異教徒」という存在をこの作品に再登場させたことは、この点に意義を見出し得るだろう。

中世盛期の宮廷文化、そして宮廷文学とは、その源を東洋に発し、反十字軍的ともいえる過程を辿って、教会の支配からの独立を主張する新たな世俗文化の発展を伝えるものであった。東洋全体を代表する人物フェイレフィースの旅程はあたかもこの運動の辿った経路をなぞるかのようである。その根元たる東洋へと憧憬の眼差しを向けつつ、最終的に東西の結びつきを構築する『パルツィヴァール』という作品は、この文化伝播の完成を象徴するものであるだろう。

異教徒と東洋という二つの要素を宮廷叙事詩『パルツィヴァール』に取り入れた詩人の意図は、俗人たる自分たちのために創作された新しい文学の性質を再確認し、それを行うに相応しい広がりを持った物語世界を創造することにあつたと言えるのではないだろうか。

註

- 40) Karg, S. 30.
- 41) 古典古代より伝わる、ガンジス河畔の地名 Paribothra に由来しており、今日の Patna である。Kunitsch (1984), S. 90.
- 42) これら異教徒の国についての記述をそれぞれ照合すると、とくにその面積についての情報は矛盾をきたしているわけだが、非キリスト教国の強大さ、広大さを強調するためのヴォルフラムの詩的表現ととらえれば問題はあるまい。
- 43) これもやはり古典古代より東洋の地名として伝わる Taprobane の変名。Ebd. 『パルツィヴァール』中では引用部分のようにトリバリボートの首都として設定されており、他の部分では高価な布地や貴石といった奢侈品の特産地としてたびたび名が挙げられる。
- 44) 古典古代時代より金の産地として知られる地名。金を採掘するダルド族が住むとされる。ヴォルフラムもこの伝統にのっとってこの地名を豊かな金の産地として用いており、トリバリボートはこの南方に位置するとされる。ただし、『パルツィヴァール』において金の採掘にあたったのはアラビア人となっており (71, 22ff), 作中でこの後頻出する「アラビア人の黄金」という表現はおそらくここでのイメージと結びついている。Ebd., S. 89.
- 45) 彼女については、ヴォルフラムは美醜を表すシンプルな形容詞の一つさえ用いていない。これはあるいは、非人間的の身体を持つ可能性のある人物を作中で騎士のミネ奉仕の対象とすることに対するためらいの表われであるのだろうか。
- 46) ヴォルフラムが頻用する、諧謔的な表現の一つである。
- 47) 前注同様、諧謔的な表現。
- 48) ここでは割愛したが、クンドリーエの弟マルクレアーティウレについても「彼女と同じ容貌」をしているとされ、同様の身体描写がなされる (517, 20ff)。
- 49) インドについての中世盛期のイメージを最もよく伝えてくれるテキストとして、当時の人口に膾炙した「プレスター・ジョン伝説」と、いわゆる「アレキサンダーもの」が挙げられる。いずれも逸名作家『西洋中世奇譚集成 東方の驚異』(池上俊一 訳) 講談社 2009年に所収。

- 50) 彼女の服装に関しては、宮廷叙事詩の他の例にもれず色彩や裁縫について非常に詳細な記述がなされる。「瑠璃よりも青いゲント産の花嫁織」、「金糸を縫い込んだ絹地で裏打ちしたロンドン製の孔雀の帽子」、「豪華なビロード地のフランス風のフード付きマント」など (313, 1ff / 778, 13ff)。いずれにも西欧の具体的地名が用いられているのは、異教徒の動物的身体とのコントラストをなそうというヴォルフラムの意図であろう。
- 51) 特に天文学については、その運行からパルツィヴァールの運命を読み取るためにアラビア語で七つの惑星の名を挙げている (782, 1ff)。これもまた、ヴォルフラムが当時西欧にアラビア語経由で摂取された科学的知識を何らかの手段で獲得していた具体的証拠である。
- 52) 上述のように、トリバリポートに関してはその叙述が極端にすくなく、ここで述べられた出来事についても、これ以上の詳細は不明である。が、後の展開から考えてツァツァマンクでのガハムレトの行動とのアナロジー化が意図されていると考えてよいだろう。
- 53) 異なる知の次元の統合による物語世界の産出については彌永、上掲書188～190頁を参考にした。
- 54) Groos (2004), S. 81.

(本学非常勤講師)
2012年4月6日受理